

Ⅱ LD・ADHD・高機能自閉症等の理解

■ 学習障害（LD）

1 学習障害の概要

学習障害(Learning Disabilities)とは、基本的には全般的な知的発達に遅れはないのに、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態のことをいいます。学習障害は、その原因として、中枢神経系に何らかの機能障害があると推定されますが、視覚障害、聴覚障害、知的障害、情緒障害などの障害や、環境的な要因が直接的な原因となるものではありません。

2 学習障害により困難を示す領域

学習障害により困難を示す領域は以下のとおりで、学習障害は、このうちの一又は複数について著しい困難を示す状態を指します。

- ① 聞く能力
他人の話を正しく聞き取って、理解すること。
- ② 話す能力
伝えたいことを相手に伝わるように的確に話すこと。
- ③ 読む能力
文章を正確に読み、理解すること。
- ④ 書く能力
文字を正確に書くこと、筋道立てて文章を作成すること。
- ⑤ 計算する能力
暗算や筆算をすること。数の概念を理解すること。
- ⑥ 推論する能力
事実を基に結果を予測したり、結果から原因を推し量ったりすること。

3 学習障害の特性

(1) 見逃されやすい障害であること

学習障害は、障害そのものの社会的認知が十分でなく、また、一部の能力の習得と使用に困難を示すものであるため、単に学習が遅れているあるいは本人の努力不足によるものとみなされてしまうことがあります。そのため、障害の特性に応じた指導や支援の必要性が見逃されることがあるので、まずは、特別な教育的な支援が必要であることを保護者や学校教育関係者に認識してもらう必要があります。特に、早期からの支援が効果的であることを踏まえれば、通常の学級の担任がその特性を理解し、適切な指導や必要な支援の意義を認識することが重要です。

(2) 指導の形態

学習障害の児童・生徒は、通常の学級における学習に参加できるものの、個々の障害の状態に応じた配慮が必要な場合や、特別の場において個々の障害の状態に応じた特別の指導が必要になる場合があります。

(3) 他の障害との重複がある場合が多いこと

学習障害は、発達障害の一つであり、注意欠陥多動性障害を併せ有する場合や一部の広汎性発達障害と近接している場合があり、その程度や重複の度合いは様々なので、個々の児童・生徒に応じた対応が必要です。

(4) 他の事項への波及

学習障害により、ソーシャルスキルやコミュニケーション能力を発揮したり、対人関係を形成したりする際に様々な困難が生じる場合があります。

■ 注意欠陥多動性障害（ADHD）

1 注意欠陥多動性障害の概要

注意欠陥多動性障害(Attention-Deficit / Hyperactivity Disorder)とは、年齢あるいは発達に不釣り合いな注意力、又は衝動性・多動性を特徴とする障害であり、社会的な活動や学校生活を営む上で著しい困難を示す状態のことをいいます。通常7歳以前に現れ、その状態が継続するものであるとされています。注意欠陥多動性障害の原因としては、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定されています。

一定程度の不注意、衝動性又は多動性は、発達段階の途上においては、どの児童・生徒においても現れうるものです。しかし、注意欠陥多動性障害は、不注意、衝動性又は多動性を示す状態が継続し、かつそれらが社会的な活動や学校生活を営む上で著しい困難を示す程度の状態を指します。

2 注意欠陥多動性障害の具体的な状態像

注意欠陥多動性障害とは、典型的には、年齢あるいは発達に不釣り合いな程度において、以下のような不注意、又は衝動性・多動性の状態を継続して示し、それらが社会的な活動や学校生活を営む上で著しい困難を示す状態を指します。

① 不注意

気が散りやすく、注意を集中させ続けることが困難であったり、必要な事柄を忘れやすかったりすること。

② 多動性

じっとしていることができず、落ち着いて活動や課題に取り組むことが困難であることから、過度に手足を動かしたり、話したりすること。

③ 衝動性

話を最後まで聞いて答えることや順番を守ったりすることが困難であったり、他人の行動をさえぎったりしてしまうこと。

3 注意欠陥多動性障害の特性

(1) 見逃されやすい障害であること

注意欠陥多動性障害は、障害そのものの社会的認知が十分でなく、また、注意欠陥多動性障害のない児童・生徒においても、不注意、又は衝動性・多動性の状態を示すことから、注意欠陥多動性障害の児童・生徒は、故意に活動や課題に取り組むことを怠けている、自分勝手な行動をしているとみなされてしまうことがあります。そのため、これらの振る舞いが障害に起因しており、その特性に応じた指導及び支援の必要性が見逃されることがあるので、注意欠陥多動性障害については早期の支援が効果的であることを踏まえれば、特に低学年の段階の通常の学級の担任が注意欠陥多動性障害の特性を理解し、適切な指導や必要な支援の意義を認識することが重要です。

(2) 指導の形態

注意欠陥多動性障害の児童・生徒は、通常の学級における学習に参加できるものの、個々の児童・生徒の障害の状態に応じた配慮が必要な場合や、特別の指導の場において個々の障害の状態に応じた特別の指導が必要になる場合があります。

(3) 他の障害との重複がある場合が多いこと

注意欠陥多動性障害は、発達障害の一つであり、学習障害や高機能自閉症を併せ有する場合が多く、その程度や重複の度合いも様々であり、個々の児童・生徒に応じた対応が必要です。

(4) 他の事項への波及

注意欠陥多動性障害により、ソーシャルスキルやコミュニケーション能力を発揮したり、対人関係を形成したりする際に様々な困難が生じる場合があることにも留意する必要があります。

■ 自閉症又はそれに類するもの

1 自閉症又はそれに類するものとは

自閉症の主な特徴として、人への反応やかかわりの乏しさなど、社会的関係の形成に特有の困難さが見られること、言語の発達に遅れや問題があること、興味や関心が狭く、特定のものにこだわることのほか、刺激への過敏性や幼児期に見られる多動性などが挙げられます。

知的発達の遅れを伴わない自閉症は高機能自閉症と呼ばれ、知的発達の遅れを伴う自閉症は低機能自閉症と呼ばれることがあります。

それに類するものとは、基本的に上に挙げた自閉症の状態に類似する障害をいいます。例えば、高機能自閉症と同様の行動特性を有しますが、言葉の発達の遅れが目立たないアスペルガー症候群があります。

2 自閉症の特性

(1) 状態の把握

自閉症は、以下のような特徴によって規定され、医学的には広汎性発達障害に含まれる障害です。

- 人への反応やかかわりの乏しさなど、社会的関係の形成に特有の困難さがみられる。
- 言葉の発達に遅れや問題がある。
- 興味や関心が狭く、遅くとも3歳くらいまでに症状が現れる。

これらの特徴は、軽い程度から極めて重い程度まで見られ、児童・生徒個々の状態像も多様です。また、多くの場合、知的発達の遅れを併せ有しています。

なお、自閉という文字が呼称に使われていることから、人を避けて自分の殻に閉じこもるというイメージをもたれやすく、極端な引っ込み思案や人間嫌いなどと混同されがちですが、引っ込み思案などは、他人の存在や思いを強く意識しており、対人関係の不適切な状態です。自閉症ではないことに留意する必要があります。

◆ 高機能自閉症、アスペルガー症候群

自閉症の中で知的発達の遅れがない場合は、高機能自閉症と呼ばれています。

また、自閉症に類似するものにアスペルガー症候群があります。アスペルガー症候群は、知的発達及び言語発達の遅れには問題がないのが特徴です。いずれも脳の機能障害と考えられており、養育の問題が原因ではありません。

特に、アスペルガー症候群の人々は、幼児期には比較的良好な発達をするために見過ごされがちで、集団行動が必要とされる頃に問題となる人々です。彼らは、集団に入れず、身体運動が不器用であったり、興味が偏っていたり、友達をほしがらなかつたり、言葉をその字面どおりに受け取ってしまい比喩や冗談を理解できなかつたりします。また、「人が考えていることを推測できない、その場の雰囲気を受け取ることができない、といった特徴があります。そのためにいじめにあつたり、非言語的なコミュニケーションが苦手なことから、周りの状態を理解できないで被害的になつたりして二次的な適応障害が出てくる場合があります。

中には非常に能力の高い人たちがいることも知られており、科学者や音楽家などアスペルガー症候群ではないかと考えられている例もあります。

文部科学省が設置した特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議の最終報告「今後の特別支援教育の在り方」（平成15年3月）では、アメリカ合衆国精神医学会の診断基準（DSM-IV）を参考に、高機能自閉症の定義、判断基準の試案を示しています。

高機能自閉症とは、3歳位までに現れ、①他人との社会的関係の形成の困難さ、②言葉の発達の遅れ、③興味や関心が狭く特定のものにこだわることを特徴とする行動の障害である自閉症のうち、知的発達の遅れを伴わないものをいう。

また、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される。

※ 本定義は、DSM-IVを参考にした。

※ アスペルガー症候群とは、知的発達の遅れを伴わず、かつ、自閉症の特徴のうち言葉の発達の遅れを伴わないものである（DSM-IVを参照）。なお、高機能自閉症やアスペルガー症候群は、広汎性発達障害（Pervasive Developmental Disorders・・・PDD）と略称）に分類されるものである（DSM-IVを参照）。

（「今後の特別支援教育の在り方（最終報告）」より）

(2) 原因

自閉症の原因はまだ明らかではありませんが、これまでの研究からは、何らかの因子が胎児期から生後の早い時期までに、脳の機能の一部に影響を及ぼすと考えられています。それは、知的発達の遅れや、一部にはてんかんや脳波の異常が見られるためです。

なお、男子に多い傾向があり、以前は、原因として親子関係の不全を重視する考えがありました。現在は否定されています。

(3) 行動に見られる特徴

ア 対人関係

視線が合わない、名前を呼んでも振り向かない、人を意識して行動することや人に働きかけることが見られないなど、人へのかかわりや人からの働きかけに対する反応の乏しさが幼児期に見られます。

しかし、障害の程度にもよりますが、周囲の適切なかかわりによって、対人関係は少しずつ芽生えてきます。しかし、未熟さが残ることが多くあります。

イ 言語

自閉症が重度であれば、言語の獲得は困難であり、わずかな表出言語があっても、意思の伝達に活用するまでには至らないことが多くあります。また、一方では、知的機能に遅れがない場合は、一見しただけでは、障害があることが分からないほど、話すことができる者もいます。

言葉の発達は、単に遅れがちというだけでなく特異な使用があります。例えば、言葉の出始めでは、即時反響言語（エコラリア／おうむ返し）、遅延反響音（聞き覚えの機械的繰り返し）、あるいは独り言が多くあります。それらは、伝達機能を持ちませんが、徐々に伝達機能をもつ言葉に育ち始めます。その段階では、その子どもの特性をよく理解する者は、その言葉のもつ意味が適切に理解できる場合があります。

言葉が伝達機能を持ち始めると、例えば、ジュースが欲しくなると、「ジュース、ほしいの?」と他者からの質問と同じようなイントネーションで話したり、また、クレヨンで絵を描いたときに教師に「じょうずね」と褒められたことがあると、後日、クレヨンを使いたいときには「じょうず、じょうず」と訴えたりすることが見られ、機能性を帯びてきます。

しかし、言葉を生活に円滑に活用するには、次のような課題があります。

(ア) 特定の事物の名称や文字（漢字を含む）などを機械的に記憶することは速いが、抽象概念の形成、因果関係の理解、また、同一の言葉でも文脈や状況によって意味が変化することなどの理解が困難である。

(イ) 獲得した言葉が活用されにくい。

(ウ) 身振りなどの伝達手段の理解と活用が不得手で、例えば、指差す、うなずくなどが使えず、また感情が表情に現れにくい。

ウ 同一性への固執

同一性への固執は、いわゆるこだわりとして現れ、長期にわたり持続しがちで、こだわりの対象は新たに別のものによって変わっていく傾向があります。こだわりの現れ方としては、次のようなものがあります。

(ア) ある行動を同一のパターンで繰り返すことが日常生活の様々な場面で見られる。例えば、ごく単純な動作、仕草、あるいは遊びを飽くことなく繰り返すことがある。

また、日常生活や遊びなどの活動に手順を定め、その順番を変えないことがある。その手順は儀式的で合理的でないことも多く、その一連の活動が円滑になされないような状態になっても、順番通りに遂行しないと気が済まないような状態が見られる。また、食事の際にも、特定の食器のみを使う、特定の場所のみで食べる、特定の順序や食べ方を決めて、それに極端に固執することなどがある。

(イ) 環境の変化に適応できないことである。例えば、学校の日課が急に変わると、適切に対応することができず、著しく動揺することも見られ、入学や進級、転居などでも、その変化には想像を超えた苦痛を伴うことがある。

(ウ) 特定の事物に興味と関心が集中することである。例えば、漢字、カレンダー、乗り物など、あるいは描画などが対象となる。そうした特定の事物への興味・関心が何年

も続き、それに関する多量の知識や高い技能を驚くほど身に付ける場合がある。知的発達が遅れている場合は、感触や身体運動感覚、嗅覚などを媒介とする自己刺激に興味・関心が集中することもある。また、例えば、わずかに開いている窓を閉める、わずかに傾いている掲示物を直すなどのこだわりを示す者もいる。

エ その他の特性

以下の行動は、他の障害のある児童・生徒にも見られますが、自閉症の場合、比較的顕著ですので概要を述べます。

(ア) 感覚刺激への特異な反応

ある種の刺激に特異的に興味を示す反面、別の刺激には、極端な恐怖を示すことがあります。

このような反応を引き起こす刺激の性質には、一貫した特徴は認められませんが、例えば、低周波律動音（空調機器、エレベーター）、きらきらと光るもの（銀紙、セロファン）などが好まれる対象となる場合があります。また、種々の感覚を同時に処理することが不得手であり、例えば、姿勢を制御することに意識が集中し、その他の働きかけには注意を向けられないなどがあるとされています。

(イ) 食生活の偏り

極端な偏食があり、ほんの数種類の食物だけで他は一切受け付けないという状態が何年も続くことがあります。偏食については、低年齢段階によく見られますが、適切な指導により改善されることが多くあります。

(ウ) 自傷等

混乱、欲求不満、脅威等に対して、自傷等の行動をとることがあります。自傷については、例えば、頭や顔を自分で殴打する、壁に打ち付ける、あるいは指を噛むなどの行動がありますが、それが激しい場合は負傷することもあるので軽視してはなりません。そのような行動の理由は推察できない場合もありますが、周囲の対応がその行動を強化している場合もあることに注意を要します。

また、本人にとって耐えられない音刺激を手などで耳をふさいで遮断しようとする行動がありますが、やがて音刺激とは無関係に嫌悪状況に対する回避や防衛反応としての意味を帯びてくる場合が多くあります。

一般に、自閉症の子どもは、状況の変化に対応する力に乏しいので、心理的な混乱や不安に陥りやすく、さらに、窮地に陥っていることに対して、援助が必要であることを理解することが重要です。